

学習者の自然発話に見られる日本語リズムの特徴

小熊 利江

要 旨

初級・中級・上級・超級の4レベルの日本語学習者による OPI 会話を対象に、自然発話スタイルにおける日本語のリズムの習得状況について研究を行った。その結果、発話リズムの不自然さの現象を「拍の増加」、「拍の減少」、「拍の交替」に分類することができた。さらに9種類に細分化し、不自然さを引き起こす要因について分析を行った結果、「拍の増加」現象のうち、母音の挿入・添加によるものが最も大きく影響していることが明らかになった。また、日本語口頭能力レベルが高くなるにしたがって話速が速くなり、発話リズムの実現のタイミングもより適切になっていく様子が見られた。超級レベルの学習者の発話ではリズムの不自然さがほとんど見られなかったが、そのなかでは長音と促音の脱落・短縮の問題が多かった。超級レベルになっても不自然さの残る長音と促音の長さの保持が、日本語の発話リズムのなかで最も習得しにくい項目であると推察される。

【キーワード】 発話リズムの習得、自然発話スタイル、日本語口頭能力レベル、特殊拍の長さのコントロール、超級学習者

1. はじめに

話しことばのリズムとは、一定の間隔において音の強弱、長短などの繰り返しが行われることを指し、その型や種類は言語によって異なっている。日本語のリズムの特徴としては、モーラ（拍）仮説が唱えられている。リズムの客観性は必ずしも検証されているわけではないが、拍は日本語の心理的なリズム単位であるという見解が一般的である。窪菌（1998）によると、拍の役割の1つとして時間制御の単位であることが挙げられており、本研究においても、日本語の発話リズムについて拍の長さのコントロールという観点から分析を行う。

異なる言語リズムを母語に持つ日本語学習者にとって、日本語のリズムを適切に実現することが困難なことは、日本語教師の間でも経験的に認識されている。学習者の発話では拍のリズムが乱れ、不安定な印象を受けることが多い。だが、このような現

象を感覚的に知っているだけでは、適切な指導の方策を考案するためには不十分である。また、日本語能力レベルが最も高く日本語母語話者に近いとされる超絶レベルの学習者にも、不自然な発話リズムが起こるのだろうか。もし起こるとすれば、それはどのようなものなのだろうか。超絶レベルの日本語学習者の誤りは、第2言語習得研究の面から日本語のリズム習得の困難さと何らかの関係があると考えられる。本研究では、現場の教師が日頃感じている学習者による発話リズムの不自然さの実態について調べ、その傾向を量的に明らかにして分類を行う。その結果は、音声指導を行う上でも有効な資料となると考える。

2. 本研究の位置付け

日本語学習者の発音の問題点については、今までにいくつかの研究で論じられている。助川（1993）は12言語を対象に、その言語を母語とする学習者の発音の傾向について、日本語教育経験者に内省を求めるアンケート調査を行った。日本語の発話リズムに関してまとめると、「長音の長さが不十分」「促音が誤って挿入されたかのように聞こえる」「拍の長さが不均等」などの項目に多くの母語話者があてはまるという結果であった。このことから、日本語のリズム単位である拍の長さが不適切なことが、発話リズムを乱す最も大きい原因であると予想される。しかし、この調査はあくまでも回答者の内省によるものであり、実際の音声をもとに検討されているものではない。

実際の学習者の発話を分析し、発音の問題点を指摘している研究としては、横井（1998）の研究が挙げられる。横井自身が、日本人が聞き違ふような音をチェックした結果、「長母音と短母音」「連続する母音のリズム」「小さい「っ」」などの問題が多かったと報告しており、ここでも主に特殊拍に関連した音の長さが、学習者の発話リズムに大きく影響しているようすがうかがえる。

拍の長さのコントロールの影響によって起こる日本語学習者の発音の誤りについて、山崎（1995）は英語・西語・独語を母語とする3名の中級学習者を対象に、漫画を見て即席に物語を作るナレーション発話の調査を行った。山崎の聴覚印象による分析の結果、拍を実現する上での誤りは、特殊拍などの脱落による「拍の減少」よりも、不要な個所での長音化や促音化、休止が挿入される「拍の増加」のほうが多く見られたと報告されている。ただ、「拍の減少」と「拍の増加」について、具体的な内訳は示されていない。

特殊拍を含んだ単語の発話について、学習者の日本語能力レベルの観点から分析されている研究としては、Toda (1996) と長井 (1997) の研究がある。いずれも英語母語話者の初級学習者と上級学習者を対象にして、読み発話の音響分析を行っている。上級学習者は特殊拍の産出にあまり問題がなかったのに比べ、初級学習者には拍単位の時間制御が困難なようすが観察された。

これらの研究は、初級レベルと上級レベルの比較のみであるが、習得研究においては中級レベルを含めた詳しい過程を示す必要がある。一方、超級学習者を対象としたリズム習得研究も重要である。彼らの発話リズムの不自然さは即ち最も習得困難な問題である可能性が高いからである。従来、日本語能力レベルの観点からの音声習得研究は、読み発話スタイルの音声を対象としたものが多く、自発的な発話について調査を行ったものはほとんど行われていない。自然発話スタイルにおいては、学習者が言語のうち発音以外の様々な点に注意を向ける必要があり、話者の注意の及ばない潜在的な能力が表れるとされている。自然発話スタイルの音声を観察することは、学習者の習得の実態を測るうえで最も妥当な方法であると考えられる (Tarone 1983)。

以上のことを踏まえて、本研究では、初級から超級までの4段階の日本語能力レベルごとに、学習者の自然発話スタイルの音声を分析し、発話リズムの実現傾向について調査を行う。

3. 研究の目的

本研究では、以下の2点について明らかにすることを目的とする。

- (1) 学習者の発話リズムにおける不自然さの傾向について、量的に調べて分類を行う。
- (2) 初級・中級・上級・超級学習者の発話を観察し、各レベルにおけるリズムの不自然さの特徴について体系的に報告する。特に、超級レベルの学習者について観察し、日本語リズムの最も習得困難な要因を探る。

4. 調査の概要

4-1 資料

本研究では、超級のレベル設定のある ACTFL OPI⁽¹⁾ における学習者の発話を対象とする。OPI の日本語口頭能力レベルの判定は総合力から行われるが、音声面も考慮されるため発話リズムの習得状況を検討するうえで適当な資料であると考えられる。

表 1 学習者の母語・レベルごとの人数

	初級	中級	上級	超級	計
英 語	3	9	10	5	27
中国語	5	9	9	2	25
韓国語	3	9	10	5	27
計	11	27	29	12	79

英語・中国語・韓国語を母語とする日本語学習者それぞれ 30 名ずつの全 90 名を対象に、OPI の会話を収録した KY コーパス⁽²⁾を用いた。各母語話者 30 名のレベル別の内訳は、初級 5 名、中級 10 名、上級 10 名、超級 5 名である。インタビュー会話では、たいてい始めに自己紹介や職業などについて話すよう要求されている。これらの応答は、学習者にとって何度も繰り返し行われてきた話題で、学習者の習得状況を測る材料とするのは不適切であると考えられる。そのため本研究では、これらの話題についての会話が行われた直後から 5 分間の会話を取り出して分析の対象とした。なお、会話テープのなかで、録音状況が著しく悪く音声評定に不適切なものを分析の対象から除いた。その結果、対象とされる学習者数は 79 名、母語とレベルそれぞれの内訳は表 1 のようになった。

4-2 評定の方法

OPI の会話テープを聞いて、学習者の発話部分について日本語のリズムに関する不自然さを抽出し、評定用紙に記入する。具体的な作業は、以下の 3 点である。

- (1) 拍の長さに関して不自然だと感じた部分を全て書き出す。
- (2) その発音の不自然さの程度を 4 段階に判定する。
- (3) 各学習者の発音について全体的な印象を記述する。

各評定者に、この方法について説明を行い、例を示して理解をはかった。テープ内の学習者の順序は評定者によって異なるようにランダムに配置し、評定の作業は個人のペースで行われた。評定者は、日本語母語話者である日本語教師 8 名である。うち筆者を含む 3 名が学習者全員の発話 450 分の評定を一貫して行い、最終的に各学習者の発話が 5 名によって評定されるように調整した。本稿では 5 名の評定結果のうち、2 名以上に不自然だと指摘された個所を「不自然な」ものとし、その他を「自然な（不自然ではない）」ものと見なすことにする。そのため本稿は、発話リズムの不自然さのなかでも、特に目立つ点について取り上げることになる。評定結果は、5 名全員が同

一の個所を指摘した割合が全指摘個所の 1.2%、4 名の一致が 6.0%、3 名が 13.7%、2 名が 28.1%であった。

5. 分析の結果と考察

5-1 日本人評定者の聴覚印象

日本語学習者の発話リズムの検討を行う前に、まず日本語母語話者の評定の一致率について見てみたい。学習者 79 名の全発話の中で、評定者による不自然さの指摘に 2 名以上の一致が見られたものは 49%で約半分の割合であった。残りの 51%は、5 名の評定者のうち 1 名ずつによる指摘であったということになる。

日本語母語話者は、日本語の音声を聞く場合、1 つの音韻を他の音韻と区別するため、その音の範疇を設定して知覚していると考えられている。しかし、母語話者による知覚範疇は完全に一致しているものではない。母語話者であっても、日本語音声の聴覚的な判断に多少のばらつきが見られることが報告されている (Enomoto 1992; 内田 1993; Toda 1996)。今回の調査で、評定者の指摘が一致していない個所は、母語話者による音の長さの知覚判断にも、このような幅のあることが 1 つの原因として考えられる。

さらに、内容のある発話を聞く場合、評定者の認知的な注意が音声以外の様々な分野や、学習者の発話中に含まれる誤りの存在、意味不明な文の推測の作業などに分散されることも影響している可能性がある。その結果、各評定者の指摘数が少なくなったことが考えられる。一方、小熊 (2001) による学習者の読み発話スタイルの音声を扱った研究では、7 名の評定者のうち 5 名の一致率が約 96%であったと報告されている。この場合、評定の内容はあらかじめ定まった単語についてであり、その音のみに注意を集中することができたためと考えられる。もし、学習者 79 名全員の発話内容が予めわかっている場合には、不自然さの指摘数が多くなり、一致率も高くなることが予想される。したがって本研究の結果は、様々な要因に影響を受ける普通の会話に近い状況において、不自然さが感じられたものが表れていると言える。

また、評定者の指摘が一致しなかった理由として、特に気になるものや許容範囲が異なったことなど個人差によるものも考えられる。このような個人差を考慮すると、学習者の自然発話を扱う場合、標準的な聴覚印象を測るには、1 人ではなく複数の評定者が学習者の発音を聞き判断することが望ましいであろう。

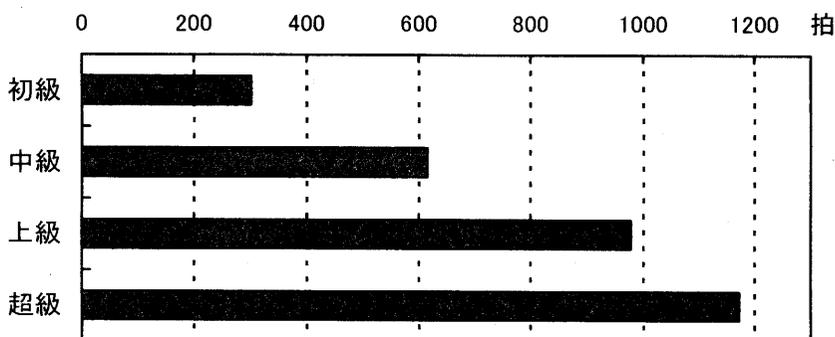


図1 各レベルにおける発話量の平均（1人あたりの総拍数）

5-2 各レベルにおける発話量

次に、日本語学習者の自然発話についての評定結果を分析する。資料とした1人5分間のなかでの発話量は学習者個人によって異なっているが、本稿では、さまざまな比較を行うために、量的な分析の単位として拍数による割合を求めることにする。拍数算出の際、「はい／ええ」などの応答、感嘆詞、フィラー、インタビューの発話を単に繰り返したものの、日本語以外の言語などが挿入されている場合はそれらを除き、自発的で実質的な発話のみを対象とした。このように算出された1人あたりの発話拍数の平均値を、日本語口頭能力レベルごとに図1に示す⁽³⁾。初級レベル301拍、中級レベル615拍、上級レベル978拍、超級レベル1173拍であった。

学習者1人あたりの総発話拍数の平均を示した図1の数値から、学習者の日本語会話能力レベルが高くなるにしたがって発話拍数も増えていることがわかる。個人差やインタビューの発話量との兼ね合いがあるにしても、概して日本語口頭能力レベルが高くなるにつれて話速が速くなっていることが推察できる。評定者の聴覚的な印象によっても、日本語口頭能力レベルが高くなるにつれて、発話中のポーズが短くなり話速も速くなっていることが確認された。さらに、上級レベルの一部の学習者や超級レベルの学習者の発話では、日本語の文自体を作るのに苦労しているために起こるようなポーズはほとんど見られず、日本語母語話者と同じような速度で話されていた。

5-3 発話リズムの不自然さの全体的な傾向

次に、日本語のリズムの単位として拍の時間的な不適切さの観点から検討する。学習者による発話リズムの不自然さは、音を発したり続けたり止めたりするタイミングが適切ではないために起こる。その結果、日本語母語話者には、余分な音が挿入され

たり必要な音が脱落したように知覚され、発話リズムが乱れたと認識されてしまう。

今回の評定内容をまとめた結果、このような発話リズムの乱れの現象は、(1) 拍の増加、(2) 拍の減少、(3) 拍の交替によるものの3種類に分けられた。(1) 拍の増加とは、意図された言葉より実際の発話のほうが音が長く知覚され、全体として拍数が増えたように感じられた場合である。(2) 拍の減少とは、逆に音が短く知覚され拍数が減ったように感じられた場合、(3) 拍の交替とは、理論上の拍数は同じであるが、拍を構成する音が変わったためリズムが乱れたように感じられた場合である。

さらに、これらの現象について、(1) を(1-a) 母音の挿入・伸長(短音が長音に聞こえるなど)、(1-b) 子音の挿入・伸長(促音が挿入されたように聞こえるなど)、(1-c) 鼻音の挿入・伸長(撥音が挿入されたように聞こえるなど)、(1-d) 拗音の直音化(拗音が1拍分の長さに聞こえるなど)の4種類に、(2) を(2-a) 母音の脱落・短縮(長音が短音に聞こえるなど)、(2-b) 子音の脱落・短縮(促音が聞こえないなど)、(2-c) 鼻音の脱落・短縮(撥音が聞こえないなど)、(2-d) 二重母音化(2つの母音が1拍分の長さに聞こえるなど)の4種類に細分化することができた。これらの分類と実例を表2に示し、学習者による日本語のリズムの実現傾向を詳しく検討することにする。

表2の分類をもとに、各日本語口頭能力レベルにおける発話リズムの不自然さの種類と出現回数を表3に示した。学習者のレベルごとの人数は異なるが、学習者79名の全体的な傾向として、(1) 拍の増加、(2) 拍の減少、(3) 拍の交替の3種類のうち、(3) 拍の交替の現象は約3%で非常に少ないようすが見られる。実際、発話中に拍の交替が起こっていたとしても、それによって発話リズムが不自然になっているとの認

表2 発話リズムの不自然さ現象の分類

(1) 拍の増加	例
(1-a) 母音の挿入・伸長(短音が長音に聞こえるなど)	来たことが ⇒ きいたことが
(1-b) 子音の挿入・伸長(促音が挿入されて聞こえるなど)	勉強したり ⇒ 勉強しったり
(1-c) 鼻音の挿入・伸長(撥音が挿入されて聞こえるなど)	寺の ⇒ てんらの
(1-d) 拗音の直音化(拗音が1拍の長さに聞こえるなど)	旅行に ⇒ りよこうに
(2) 拍の減少	例
(2-a) 母音の脱落・短縮(長音が短音に聞こえるなど)	お兄さんと ⇒ おにさんと
(2-b) 子音の脱落・短縮(促音が聞こえないなど)	面白かった ⇒ おもしろかた
(2-c) 鼻音の脱落・短縮(撥音が聞こえないなど)	いろんな ⇒ いろな
(2-d) 二重母音化(2つの母音が1拍に聞こえるなど)	買物に ⇒ 「かい」が速い
(3) 拍の交替	例
長音の撥音化、直音の促音化など	病気で ⇒ びよっきで

表3 各レベルにおける不自然さの種類と数

	(1) 拍の増加					(2) 拍の減少					(3) 拍の 交替	計
	a 長音	b 促音	c 撥音	d 拗音	小計	a 長音	b 促音	c 撥音	d 二重 母音	小計		
初級 (11)	22	13	2	2	39	11	4	1	4	20	4	63
中級 (27)	80	44	1	2	127	53	36	14	2	105	8	240
上級 (29)	54	34	0	1	89	48	36	7	3	94	2	185
超級 (12)	5	7	0	0	12	10	10	1	0	21	2	35
計 (79)	161	98	3	5	267	122	86	23	9	240	16	523

* () 内の数字は、各レベルの人数。

識はなされていない。結果的に、拍の交替による発話リズムへの影響は少ないと言うことができる。(1) 拍の増加と(2) 拍の減少の現象に関しては、発話中に母音や子音が脱落・短縮する拍の減少よりも、不要な個所で母音や子音が挿入・伸長される拍の増加のほうが合計値としては多く見られた。これは、中級学習者3名を対象に行った山崎(1995)の研究と一致した結果となっている。

さらに、その内訳を見てみると、なかでも(1-a)母音の挿入・伸長による発話リズムの不自然さが、生起数の上では突出して多いことが明らかになった。日本語口頭能力が上級レベル以上の学習者の発話に対しても指摘が多かったことから、母音を短く聞こえるように発音することは習得が難しいことがうかがえる。それに次いで、(2-a)母音の脱落・短縮、(1-b)子音の挿入・伸長、(2-b)子音の脱落・短縮の順に多くなっている。撥音などによる影響は、全体に指摘がほとんどなく、習得が比較的容易であると考えられる。

ただし、表3の数値について数の上では(1)拍の増加が多いが、割合の上では(2)拍の減少のほうが多いことをここで確認しておきたい。(1)拍の増加は主に普通拍が時間的に長く発音されている現象であるのに対し、(2)拍の減少は主に特殊拍が短く発音されている現象である。会話中の特殊拍の割合は約15%であるため、この2つの母体数の差異を考慮に入れると、(2)拍の減少の生起率はかなり高いと言うことがで

きる。不自然さの起こる割合の点から、学習者の発話リズムに関して特殊拍の長さのコントロールに問題が多いという助川（1993）の調査結果と同様、特殊拍は発話リズムを乱す大きな要因であり最も困難な発音であると言える。表3の数値を見ると、なかでも長音に関連する問題が最大であることが認められた。

5-4 日本語能力レベルによる特徴

日本語口頭能力レベルごとに、発話リズムの実現の傾向を詳しく見てみよう。発話リズムに目立った不自然さの全くなかった学習者は、79名中で中級レベルの学習者1名、上級レベルの学習者1名、超級レベルの学習者2名のみであった。発話リズムの不自然さ現象について、生起数を全拍数で割り1人あたりの割合の平均を計算すると、初級レベル0.0190%、中級レベル0.0145%、上級レベル0.0069%、超級レベル0.0025%であった。表3で数が増えているように見える個所もあるが、各レベルの人数と発話量を考慮すると、不自然さの現れる頻度は、レベルが上がるにしたがって確実に低くなっている。初級レベルから中級レベルにかけては約4分の3に、中級レベルから上級レベルにかけては約半分に、そして上級レベルから超級レベルにかけては約3分の1に減っている。上級から超級にかけてが、最も高率で不自然さの減少が進んでいた。

日本語口頭能力レベルごとの不自然さの特徴として、初級と中級レベルでは(1)拍の増加の現象が多く、上級レベルでは(1)拍の増加と(2)拍の減少がほぼ同程度、超級レベルでは(2)拍の減少の現象がより多いといった具合に、レベルによって異なった傾向を示していることがわかる。超級レベルの学習者の発話リズムには、ほとんど不自然さが起こっていないが、他の3レベルの傾向と異なり(2)拍の減少のほうが多く見られる。うち長音と促音に関連する問題が大部分を占め、超級レベルになっても発話リズムが完全に習得されずに、不自然さが残る原因となっている。

このように、(1)拍の増加による不自然さは初級レベルから徐々に減っているが、(2)拍の減少は減る度合いが比較的到低いようすが見られる。特に、上級レベルから超級レベルにかけては、その傾向が顕著である。これは、発音への注意度の低い自然発話スタイルにおける特徴であるかもしれない。日本語能力レベルが高くなるにつれて話す速度も速くなり、日本語母語話者のような速度で話そうとすることが、音の長さを十分に保持することを難しくしたことが考えられる。1音節に1拍が対応する普通拍とは音節構造が異なり、特殊拍を含む音節には2拍が存在するため、母語に拍のリズムを持たない日本語学習者にとって、特殊拍の長さのコントロールは習得が困難

であることが推測される。結果的に、上級レベル以上の学習者は日本語を話すことに慣れて話速も速いため、特殊拍に関わる音節の長さの短縮を招きやすいと考えられる。

日本語口頭能力レベルによって、発話リズムの不自然さの現れ方が異なるため、教師としてはこれらの特徴を十分に留意する必要があるだろう。初級や中級レベルの学習者には、普通拍の子音や母音を伸長させないように指導し、上級や超級レベルの学習者には、特殊拍の長さを十分に保つように音声指導の内容を変えなければならない。

6. まとめと今後の課題

本研究では、意味内容の重視された自然発話を調査の対象とすることによって、日本語学習者による発話リズムの習得状況を測ることができた。様々な不自然さの現象が起こっていることが実証的な調査によって確認され、それらを分類することによって、学習者の日本語能力レベルによる特徴を具体的に示すことができた。全体的には、

(1) 拍の増加による不自然さの現象が最も多かったが、不自然な発話リズムがほとんど起きていなかった超級レベルの学習者の発話では、長音と促音に関する (2) 拍の減少による不自然さのほうが多く見られた。超級レベルの学習者の発話にも残る長音と促音の長さ保持の問題は、日本語リズムを習得する上で最も困難であることが予測される。

日本語学習者の音声について、発話リズムに着眼点を絞った今回の調査でも、日本人評定者の指摘にばらつきが見られた。特に自然発話スタイルの音声を分析する場合、日本語母語話者の間でも評定が異なることが予想されるため、標準的な聴覚印象を測るには複数の母語話者による判断をもとにすることが望ましい。また、本研究において、日本語学習者の母語によっても、発話リズムの不自然さに若干異なった傾向が見とめられた。一方、それぞれの母語に共通した発話リズムの習得過程も予想される。今後は、学習者の母語の観点からも、言語個別的な特徴や普遍的な特徴などについて稿を改めて論じたいと考えている。

注

- (1) OPI (Oral Proficiency Interview) は、最長 30 分の面接で自然発話を収集し、口頭能力を測定する評価法である。詳しくは、鎌田 (1999) を参照のこと。
- (2) KY コーパスは、OPI テスターによる日本語学習者 90 名のインタビュー形式の

自然発話である。詳しくは、山内（1999）を参照のこと。

- (3) 1人あたりの総拍数の平均値の算出は、発話された音をそのまま使用したのではなく、学習者が意図したであろう日本語の言葉に直して行った。

主な参考文献

- (1) Enomoto, K. (1992) Interlanguage Phonology: The Perceptual Development of Durational Contrast by English-Speaking Learners of Japanese. *Edinburgh Working Papers in Linguistics*, n3, 25-35.
- (2) Tarone, E. E. (1983) On the variability of interlanguage systems. *Applied Linguistics*, 4-2, 142-163.
- (3) Toda, T. (1996) *Interlanguage phonology: acquisition of timing control and perceptual categorization of durational contrast in Japanese*, Ph.D. dissertation, Australian National University.
- (4) 内田照久(1993)「中国人日本語学習者における長音と促音の聴覚的認知の特徴」『教育心理学研究』41-4, 414-423.
- (5) 小熊利江(2001)「日本語学習者の長音の産出に関する習得研究—長音位置による難易度と習得順序—」『日本語教育』109, 110-117.
- (6) 鎌田修(1999)「KY コーパスと第二言語としての日本語の習得研究」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』文部省科学研究費補助金研究成果報告書, 227-237.
- (7) 窪藺晴夫(1998)「モーラと音節の普遍性」『音声研究』2-1, 5-15.
- (8) 助川泰彦(1993)「母語別に見た発音の傾向—アンケート調査の結果から—」『日本語音声と日本語教育』文部省重点領域研究 研究成果報告書, 187-222.
- (9) 長井克巳(1997)「英国人学習者による日本語発音の特徴について」『日本音声学会全国大会予稿集』53-58.
- (10) 山内博之(1999)「OPI 及び KY コーパスについて」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』文部省科学研究費補助金研究成果報告書, 238-278.
- (11) 山崎真弓(1995)「中級日本語学習者の拍の誤りについて—ストーリーナレーション中の拍の増減と誤りの位置—」『言語文化と日本語教育』9, 189-200.
- (12) 横井和子(1998)「学習者の発音上の問題点指摘とその効果—大規模クラスを対

象にした発音チェックとフィードバック」『平成10年度日本語教育学会春季大会予稿集』159-164.

(在エジプト日本大使館 日本語講座)

An Analysis of the Japanese Language Rhythm by Learners — Observed in the Vernacular Style Speech —

OGUMA Rie

This study analyzes the Japanese speech rhythm by learners, focusing on their errors of timing control. A total of 79 vernacular style speeches are examined, which are recorded by the learners in 4 language levels: beginner, intermediate, advanced, and super-advanced. As a result, the learners' inappropriateness of the rhythm was revealed to be categorized into 9 categories. It was found that the biggest factor among them, which disturbs the naturalness of the rhythm, is 'vowel lengthening.'

From the viewpoint of the second language acquisition, the speech tempo is increasing and the timing control approximates to the native speaker according to their language levels. In examination of the features of the super-advanced learners' errors, they do not exhibit many errors in their speech rhythm, however, the 2 major problems are observed: 'consonant shortening' of the double consonants and 'vowel shortening' of the long vowels. The errors of the super-advanced learners are very meaningful in as much as it is indicated to be the most difficult aspects to acquire. Therefore, it is considered that the most difficult matter in acquiring the timing control of Japanese speech rhythm is to maintain the length of the consonants of the double consonants, and the vowels of the long vowels sufficiently.

(Japanese Language Course at the Embassy of Japan in Egypt)